

歴史の検証と記憶の継承に向き合う ユース・馬屋原瑠美さんに訊く

以下は、2025年9月30日、馬屋原瑠美さんにオンラインでインタビューを行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。聴き手は、日本反核法律家協会の田中恭子事務局が務めた。文中の脚注は編集部による。尚、インタビュー時に馬屋原さんはドイツ滞在中で、ドイツでの体験もうかがうことができた。

馬屋原 瑠美（うまやはら・るみ）さん

広島県福山市出身。早稲田大学社会科学部4年生。生きづらさにかかわる社会問題を幅広く扱う福祉社会研究ゼミに所属。盈進中学高等学校時代はヒューマンライツ部に所属し、被爆者坪井直氏の被爆証言の英訳にも取り組んだ。現在、歴史の検証と記憶の継承をテーマに卒論を準備中であり、ドイツではさまざまな戦争資料館や博物館をめぐる。

プロフィール

——本日は、よろしくお願ひいたします。馬屋原さんは、盈進中学高校時代からヒューマンライツ部でさまざまな活動に取り組んでこられたとうかがっています。どんな取り組みをされたのでしょうか。

ヒューマンライツ部に入部して、すぐに、鹿児島県にある星塚敬愛園というハンセン病療養所に連れて行っていただきました。ハンセン病回復者の方をモデルに撮った映画『あん』という作品のモデルになった方とお会いして、何故自分はこのハンセン病の問題を全く知らなかったんだろう、何故これを知らずに生きてこられたんだろう、と。知らなかったことに対する後悔や罪悪感が押し寄せてきて、そこから、もっともっと勉強しないといけない、とを感じるようになりました。

ヒューマンライツ部では、京都外国語大学の留学生を案内したり、署名活動を行っ



馬屋原 瑠美さん

たりしたことが思い出に残っています。署名活動では、2日間、広島市内で署名を集めていたときに、1日目は素通りをってしまったけれど、2日目、またあなたたちがここで頑張っている姿を見て、私もやらなきゃと思ってきたよ、と言ってくださる方に出会いました。街に出て自分の手と足で伝えるという現場での経験がとても、貴重でした。



インタビュアー田中事務局



2022年9月大久野島資料館館長の案内でフィールドワーク（写真提供：馬屋原瑠美）

——ヒューマンライツ部では、被爆者証言の英訳にも取り組まれたとうかがっています。それはどんな経緯だったのでしょうか。また、英訳の際に苦労されたことは？

もともと入部する前、盈進中高が京都外国語大学との提携で行なったイングリッシュキャンプに参加したことがきっかけで、知らない国の人たちと英語を使ってコミュニケーションすることの楽しさを知りました。ちょうどその頃、国連に派遣された先輩が全校集会でスピーチを披露して、英語で自分たちの意見、思いを国連で伝える、自分の言葉で堂々と語る姿に憧れてヒューマンライツ部に入部したのが始まりだったのですが、私が入部したときには既に被爆者坪井直さんの日本語版冊子は完成していました。それから2年くらい経って、京都外国語大学のNET-GTAS（被爆証言の世界化ネットワーク）と共同して坪井さんの証言を英訳する作業に携わりました。

英訳にあたっては、坪井さんの生きた証である証言の価値を下げてはいけない、とずっと思っていました。苦労したのは、細かい表現で、言葉のニュアンスをいかに正確に伝えるか、ということでした。例えば「She dropped off」は「She was dropped off」に、「It was black」は「It was pitch

black」に、というように。できる限り当時の状況を把握したくて、何度も何度もメールや電話で坪井さんに確認しながらの作業でした。

英訳が完成して、坪井さんに冊子を直接手渡したとき、そのときの握手の感触も忘れられません。ご存命の内にお渡しできて良かった、という想いと同時に、この握手している手があの日を生き延びて、私たちにバトンをつないでくださっているのだ、という想いがこみ上げました。

——馬屋原さんが、こういった活動に関心を抱くようになった、そもそもの原点は何だと思われますか。

母方の祖父が、平和公園で被爆体験継承者ボランティアをやっていたんです。祖父自身は広島生まれではなく、仕事で広島に来てから平和活動が盛んなことに感銘を受けて、2002年からボランティアを始めたとのこと。私は、小学5年生のときに母と連れ立って祖父の証言を聴きにいきました。そのときに、怖いことが起きた、という印象がとても強く、それ以降は小学校で毎年夏に行われていた平和教育にも真面目に向き合おう、と思い始めて。それが原点と言えるかもしれません。

大学に進学して、東京と地方のギャップに驚きました。学生の多くは、8月6日、9日など意識していないみたいで。私自身は、福島原発の被害地域にフィールドワークに行ったり、大学の友人を広島に誘って、広島の被害だけでなく加害の面を知ってもらうために、毒ガスの島として知られる大久野島や呉軍港などを歩いてみんなで勉強していくフィールドワークを自主開催したり。慰霊の日に合わせて沖縄に行ったりもしました。そうやって、いろいろ知れば知るほど、あれも勉強したい、これも勉強し

たいと止まらなかったですね（笑）。

そんな興味関心の延長で、ミュージアムや博物めぐりにのめり込んでいます。戦争の記憶がどう継承されて、記録されているのか、日本全国、海外も、韓国や東南アジアなどいろいろな国のそういう博物館をめぐっては、比較しながら見て回りました。今回、このドイツの滞在でも、いくつかの博物館を訪れました。

——ドイツの戦争資料館や博物館は、どんな印象でしたか。

先日、ドレスデンの戦争博物館に行ってきました。建物がとにかく巨大でした。中世の時代からの、主にドイツの戦争の歴史、軍事の歴史を扱っているのですが、一口に戦争といっても、動物愛護の観点から見た戦争、娯楽の音楽から見た戦争、子どものゲームから見た戦争と、さまざまな切り口で戦争が語られていて、この国の戦争の歴史検証に関する覚悟の表れ、しっかりと徹底的に向き合い続けているんだなということを感じました。こんな博物館は多分日本にはないだろうなと思いました。

去年はベルリンにフィールドワークで訪れ、ザクセンハウゼンの収容所跡などホロコーストの記憶に関するところを回りましたが、そのときに感じたのは、土壌が日本とは全然違う、ということでした。歴史・記憶の検証に関する畑の土が、ドイツではしっかり耕されていて、豊かな土になっていると。歴史の検証とは、これからも継続していくべきものだと思いますが、ドイツではそのための土台がしっかりできているのに対し、日本ではまだ畑の土が耕されていない。その違いを感じました。もちろん、ドイツでも完全・完璧、ということはない



2023年2月伊江島「反戦平和資料館ヌチドゥタカラの家」館長謝花さんとともに
(写真提供：馬屋原瑠美)

のですが、不完全だからこそ、みんなで徹底的に議論する、検証する、こういう姿勢はあまり日本では見かけないなと思いました。

一方で、今、ドイツがイスラエル支持を打ち出していることには、違和感を覚えています。ユダヤ人たちにこの国がなしたこと、この国が背負う歴史に対して、そしてその歴史を紡いできた人たちに対して、これはとても失礼な行為にあたるのではないのでしょうか。

——ドイツの若い人たちは、どのように感じているのでしょうか。

つい2、3日前にも、ドイツが新兵役制度を閣議決定しました¹。この2、3年の内に、2008年以降に生まれた男性を対象に、兵役

1 <https://jp.reuters.com/world/europe/F2WQCWVVRNM67C3NZPWAZLG5MU-2025-08-28/> 参照。

に就く意思と能力に関するテストを受けることが義務付けられるという制度が導入されるかもしれない、とのこと。兵役制度が復活するのではないかという機運の高まりを危惧しています。

ドイツで私の周りにいる若い人は、日本語が好きで日本に留学した人もいて、日本の今の状況をととてもよく知っています。ちょうど国政選挙の最中に、日本に留学していた人からは、真顔で「オレンジパーティ（参政党）やばくない？日本、大丈夫？」と言われました。多分、人種差別や排外主義を認めない倫理観や人権意識が徹底しているのだろうと思います。日本国内で参政党を中心に煽られている差別や対立分断は、危険なものだし、それが戦争につながっていく、だからこそ否定しなくてはいけない、民族や人種を分断して差別を煽るようなことは、何があるかと、絶対あってはならないことだ、というしっかりした意識を、ドイツの若者は持っています。やはり、学校教育の中で、社会歴史の授業で、「飽きるほど」徹底して学ばされたことの影響は大きいだろうと思います。

私が滞在している地域では、ドイツの中でも移民が多い地域で、近所から中国語やロシア語が聞こえてきます。言葉も文化も違う人たちが、街の中で一緒に暮らしている、共存していることがとても印象的です。日本ではネット上でも「お前何人だ」といった差別的な言葉が蔓延しているのに。人それぞれ、さまざまな側面があって当たり前ですし、ドイツでは、文化の違いなど境界線の引き方がとても緩やかなことを感じました。

——歴史を検証し、過去に学ぶ姿勢を貫くことが、日本とドイツの差なのかもしれないね。

広島から東京に出てきて強く感じたのは、みな、戦争はダメ、差別はダメと口にする割には、核抑止論を受け入れて、南西諸島にどんどん自衛隊配備が進められ、防衛費が爆上がりしていくことについて何とも思っていないようだ、ということです。その受け身の姿勢に違和感を覚えています。戦争はダメ、差別はダメ、平和を守ろうと思っているのに、なぜ平和を守るための行動につながらないのだろう、と。ただ思っているだけでは、軍事化が進むのを止められない。

だからこそ、人間は過去から学ぶ必要があるのだと思います。人は不完全で、過ちを繰り返しかねない存在だからこそ、何故あのとき戦争を選んでしまったのか、排外主義に陥ってしまったのかということを学ばないと、この国の平和は崩れ落ちてしまうのではないのでしょうか。

——最後に、今一番訴えたいことをお話しください。

今、私は高麗博物館²でボランティアをしています。この10月から始まる日本の朝鮮半島植民地支配の歴史を扱った展示づくりのメンバーの一人として活動しています。その展示の中で、在日として生きる早稲田大学の私の知り合い、彼女のライフヒストリーを取り上げようと思っています。展示を通じて、目の前にいる人、隣にいる人の抱えている痛みを想像できる人間になってほしい、ということをお伝えたいのです。軽々しく「お前何人だ」「お前帰れ」などと、自分のストレスをその人たちにおつ

2 <https://kouraihakubutsukan.org/> 参照。

けることは簡単でしょうが、そうではなくて人それぞれの生きづらさや苦しみ、電車で隣に座っている人がもしかしたらマイノリティかもしれない、という想像力を働かせること。私自身の自戒も込めて、どれほど余裕がなくなってもこれだけは死守したい、想像できるゆとりを持っていたいと思います。

日本に帰国する途中、韓国に立ち寄ってソウル市内の安重根義士記念館³や、国立日帝強制動員歴史館⁴などを見学したいと思っています。まだまだ知らなければいけないことはたくさんあると思います。根気

強く取り組みたいですね。私たちが取り組んでいることは、しょっちゅう理想主義者とか、夢を語るなどか言われますが、それに対して私の祖父は、いつも、「でも夢がないと、道はないでしょ」と言っていました。私もその言葉を大事にしたい。どれほど夢物語だと言われても、目標に向かって着実に歩いていく、という祖父の言葉を胸に刻もうと思っています。

——今日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、有難うございました。



3 <https://ahnjunggeun.or.kr/kwa-47017> 参照。

4 <https://www.fomo.or.kr/museum/jap/CMS/Contents/Contents.do?mCode=MN3029> 参照。